

中村元恒と徂徠学関係著述に関する基礎的研究

堀尾 裕真

一、はじめに

江戸時代後期に中村元恒（安永七（一七七八）年―嘉永四（一八五二）年）という人物がいた。字は大明、通称は中書、号は中僚。別号に露原翁、不用舎、希月舎と称す。父中村元茂に医を、阪本天山に儒学をまなび、のち京都に遊学した。文政七（一八二四）年、郷里の信濃（現長野県）高遠藩の藩医兼藩儒となる。嘉永二（一八四九）年、開墾事業の指導を誤解され領内黒河内に流されたのち、嘉永四年七十四歳で没した。郷土史の集大成である『露原拾葉』百五十巻が知られている。

元恒の師天山の学は、徂徠学派の一人である大内熊耳（二）を承けたものである。元恒の学は天山の学を祖述し、自己の学説を加えたもので高遠の学を大成したといわれる（三）。その学風は訓詁を排して実用を尊んだもので、利用厚生之道を説くとともに士道の退廃を

歎いて『尚武論』を著すなど士民が文事にふけることを戒めた人物でもある。

本稿は徂徠学に関係する著述の基礎的研究の一環として中村元恒およびその著述について概要を明らかにするものであり、中村元恒の著述『尚友録』の翻刻成果を発表するに先立つものである。『尚友録』は元恒による徂徠学関係著述のうちの一つでもある。賢哲百三十五名の伝記がまとめられており、特に徂徠門下七十五名の伝記は門人録的性質を有している。

中村元恒については次子の元起（三）の著『先考中僚府君行實』手写本・手稿本（四）（以下、『行實』）、元恒自伝年譜『蘧非』（五）、著述については前掲『行實』、『尚友録』については書誌事項と内容を、これら一次史料や郷土史文献、先行研究にもとづきまとめた。

中村元恒の一次史料としては、長野県伊那市立高遠町図書館に所蔵されている希月舎文庫や馬嶋家文庫、県立長野図書館に所蔵され

ているものがある。中村元恒を扱った先行研究としては高津才次郎「郷土文献の集大成(五)」『高遠町誌 上巻 歴史(二)』や北村勝夫氏の『高遠城と藩学』、「高遠町図書館資料叢書」所収の岡部善治郎氏の論考にて詳述されるものの、元恒の著述に焦点を絞った研究はいまだ多くない。しかしながら電子アーカイブとして元恒の諸資料が公開されている。本稿では、これら先行研究や諸資料にもとづき、中村家の系図、元恒の略年表を作成するとともに、元恒の著述目録を表としてまとめた。

二、 中村元恒について

二・一、中村家

中村元恒は信濃国伊那郡本郷村(現長野県上伊那郡飯島町)の医師中村伯先の長男として生まれ、父に医学を学ぶ。元恒十五歳の頃、阪本天山に入門し学び、のち京都に上り猪飼敬所に儒を、中西鷹山に医を学んだ。元恒の家系は『行實』「家系郷貫」によれば、次の通りである。

○先考。信濃高遠人。父淡齋中邨先生。初冒母姓根津氏。既而外祖父舉一男於繼室。因復本姓吉川氏。文化四年丁卯。淡齋先生謀諸親族。爲本宗中邨玄東之嗣。於是稱中邨氏。

○先世傳言。分族周防吉川氏。先世事前田侯。〔後略〕

(『行實』三丁表)

元恒の父淡齋(元茂)は仮に根津氏を名のっていたが、母方の祖父の後妻に男子が生まれたことにより、本姓の吉川氏に戻ったようである。文化四(一八〇七)年に淡齋(元茂)は親族に相談し、中邨玄東の後継となり、中邨氏を名のるようになったとある。

また、周防吉川氏から分かれ、(加賀)前田侯に仕えたとも伝わっている。以下は北村氏『高遠城と藩学』をもとに元恒に連なる系譜をまとめたものである【表1】(六)。

【表1】

白山先生	春彦	竜水	伯先	中倅	黒水
中村元規	元賢	崇広	元茂	元恒	元起
	元賢	元賢	元賢	元賢	元賢
寛文七没	享保十三没	安永七没	文政三年	嘉永四没	明治十七没
					昭和四没

中村家は代々儒医の家系であったが、元恒の父元茂の代までは程朱の学に奉じており、祖父崇広は古学派を異端視し、元恒の師阪本天山とも激論を交すなど、元恒が学統においても転機となっている。

以下の年譜は北村氏『高遠城と藩学』を適宜参照しつつ、元恒自伝年譜である『蘧非』の記述を年表形式に整理したものである【表2】(七)。

堀尾裕真

【表2】

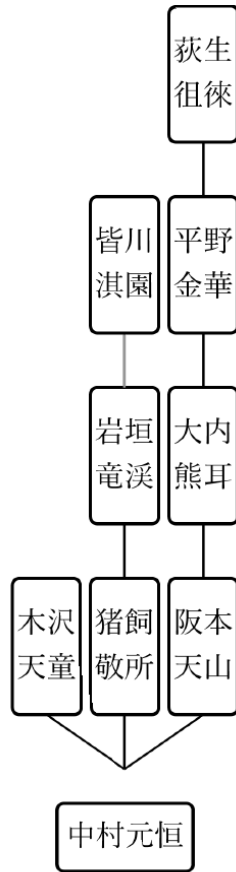
和暦	西暦	年齢	事項	和暦	西暦	年齢	事項
安永七年	一七七八	一	七月、祖父宗広卒す。 十一月、元恒飯島町本郷に生まれる。 はじめて字を習う。 四月、妹阿道生まれる。	文化六年	一八〇九三十二	二	外舅矢野藤左衛門、外甥橋蔵卒し、矢野家断絶。
天明二年	一七八二	五	『孝経』を父元茂より授けられる。	文化七年	一八一〇三十三	三	九月、弟元渙と妻子、元恒宅に寄寓。 冬、長子交太郎痘瘡にかかる。
天明三年	一七八三	六	『孝経』を父元茂より授けられる。	文化八年	一八一三三十四	四	名を翁、字を大明に改める。
天明七年	一七八七	十	四月、弟渙生まれる。	文化九年	一八一三三五	五	一亭を建てる。
天明八年	一七八八	十一	十二月、祖母有賀氏卒す。	文化十二年	一八一五三十八	八	『暦日星明』を刊行。
寛政三年	一七九一	十四	元恒、叔父に預けられる。 『傷寒論』を読む。	文政三年	一八二〇四十三	十三	六月、次子龍次郎（元起）生まれる。 八月、父元茂卒す。 『天山先生墓碣銘』刊行。
寛政四年	一七九二	十五	阪本天山に入門し、弟子となる。 十月、妹阿淺生まれる。	文政四年	一八二一四十四	十四	正月、次子元起痘瘡にかかる。 五月、『葺門録』成稿。
寛政六年	一七九四	十七	毎月、阪本天山の講席に侍す。 高遠藩士中根東平と問答し、『詩』を学ぶ。	文政六年	一八二三四十六	十六	六月、妹鷹女生まれる。
寛政七年	一七九五	十八	九月、木曾にて詩を作る。紀行一篇を著す。 十月、飯田にて詩を作る。	文政七年	一八二四四十七	十七	十月、高遠藩に招聘され、儒員兼督医事に任ぜられる。 はじめて城中にて『孟子』を講ず。
寛政八年	一七九六	十九	六月、弟元敬生まれる。 十月、三河稲垣弁蔵に医学を学ぶ。	文政八年	一八二五四十八	十八	はじめて藩主内藤頼寧に謁見す。
寛政九年	一七九七	二十	松本藩備木沢天童に詩文を学ぶ。 冬、妹阿道御子榮氏に嫁ぐ。	文政十年	一八二七五十二	二十	二月、仁科盛信を城内に祀る建議が容れられ、法堂院郭に祀る。
寛政十年	一七九八	二十一	春、甲府医学館の石坂宗哲に医学を学ぶ。	文政十二年	一八二九五十二	二十二	二月、兄玄逸（元鍾）没す。
寛政十一年	一七九九	二十二	二月、根津氏の娘を娶る。	天保元年	一八三〇五十三	二十三	九月、『信濃奇談』刊行。
寛政十二年	一八〇〇	二十三	春、根津氏の娘と離縁。 木曾藪原に居を構え、医業の傍ら読書を教える。	天保四年	一八三三五六	二十六	『論孟考文』刊行。
享和元年	一八〇一	二十四	春、京都に遊学する。中西鷹山に医学を、岩垣竜溪に詩を学び、猪飼敬所の塾生となる。	天保五年	一八三四五十七	二十七	五月、『医喩』刊行。
享和二年	一八〇二	二十五	二月、氣賀沢氏の娘を娶る。 七月、病にかかる。病中『傷寒名数解統篇』を著す。	天保六年	一八三五五十八	二十八	三月、次子元起と門人橋爪昌庵を連れて京都へ諸先生を訪ねて西遊。 猪飼敬所を西宮まで追うも会えず、四月帰宅。 八月、次子元起はじめて謁見す。
享和三年	一八〇三	二十六	閏二月、阪本天山卒す。 三月、中西深齋卒す。	天保十年	一八三九六十二	三十二	十月二十六日、罪を被り屏居二十日。
文化元年	一八〇四	二十七	六月、氣賀沢氏の娘と離縁。 九月、北原氏の娘を娶る。	弘化二年	一八四五六十八	三十四	十一月、猪飼敬所没す。
文化二年	一八〇五	二十八	閏八月、中根東平卒す。	嘉永元年	一八四八七十一	三十七	正月、次子元起的長子菅太郎、痘瘡にかかり没す。
文化三年	一八〇六	二十九	『傷寒論句解』成稿。	嘉永二年	一八四九七十二	三十八	十二月十日、黒河内村に流論。
文化四年	一八〇七	三十	正月、長子交太郎生まれる。 五月、北原氏の娘と離縁。 九月、矢野藤左衛門正直の娘（中林氏の養女）を娶る。	嘉永三年	一八五〇七十三	三十九	六月、妻没す。 高遠藩、元恒の学に奉ずるを禁ず。
文化五年	一八〇八	三十一	三月、大出村に移る。新居を「不用舎」と名づける。	嘉永四年	一八五一七十四	四十	『尚武論』刊行。 九月三日、元恒没す。

二二一、学統

中村元恒の学問は阪本天山に始まる。『行實』「家學師事」では次のように述べられている。

先考所師事凡七人。初從阪本天山先生。爲學基也。繼從猪飼敬所先生。期大成也。岩垣龍溪先生。木澤天童先生。以爲質問之輔也。醫則承家學。更從中西鷹山先生。其業全備。入稻垣豊河先生之塾。診病客。以驗其術。喻游石坂竿齋先生之門。傍探後世者流之說耳。

以下は儒学に関して元恒と師の関係を系図にしたものである【表3】。



【表3】

中村元恒は古文辞学を学んだ阪本天山(八)に師事し、次いで古注学派の猪飼敬所(九)に学び、敬所の師岩垣竜溪(十)に学ぶ。そして

信濃松本藩儒木沢天童(十一)に朱子学を学んだ。

元恒は先述の通り、師天山の学風を承け継ぎ、大成した人物として知られており、その学風の根底には古文辞学があるといえよう。

二二三、著述

中村元恒の著述については、次子の元起が『行實』「著述抄書」「中徂先生著述目録」としてまとめているほか、高津才次郎氏が刊行状況について言及している(十二)。次節で述べる徂徠学関係著述に先立ち、元恒の著述書名一覧を挙げる【表4】。表は元起の著述目録をもとに高遠町図書館「伊那市立高遠町図書館蔵和漢古書目録―希月舎文庫―」および「馬嶋家文庫目録」を参照して所蔵状況を示した。元恒の著述は膨大であるが、長野県伊那市立高遠町図書館や県立長野図書館等の所蔵資料が利用できる。また著述の学問的対象が儒学だけでなく医学、地誌や随筆と多岐に涉っているため、各分野における文献研究が今後求められよう。

【表4】中村元恒著述一覽表

[希月舎文庫]○ [馬嶋家文庫]● [佚]

通番	書名	卷数	所蔵	通番	書名	卷数	所蔵
1	周易衍注	八卷	○	43	易学源流論	一卷	○
2	周易外翼	一卷		44	訂正周易	一卷	○
3	尚書考文	七卷	○	45	尚書考	一卷	
4	毛詩通解	四卷	○	46	毛詩考	一枚	
5	論語衍注	二卷	○	47	天山先生行状	一卷	
6	中庸衍注	一卷	○	48	習文要領	二卷	○
7	孝經解義	一卷	○●	49	学則國字解	一卷	
8	大學私考	一卷	○	50	龍陽奇事	一卷	
9	大學訂本	一卷		51	辨物歌	一卷	○
10	孫子小解	二卷	○	52	希月舎年中行事	一卷	○
11	呉子小解	一卷	○	53	經說類考續	一卷	
12	中子學	三卷	○	54	古書考	一卷	○
13	尚武論	一卷	○●	55	信濃奇談	二卷	
14	尚武餘論	一卷	○	56	日本書史	一卷	○
15	尚武問答	一卷	○	57	詩論	一卷	
16	尚武問答 附録	一卷	○	58	文罰	四卷	
17	尚友録	四卷	○●	59	六經通論	一卷	○
18	尚友録 續録	一卷	○●	60	参考信濃宮傳	一卷	
19	癡門録	二卷	○	61	小史	二卷	
20	師說筆存	三卷	○	62	大語	一卷	○
21	甲源記	一卷	○	63	荒野之菅	三卷	○
22	信源記	一卷	○	64	波合記別集	一卷	○
23	信源記 續	一卷	○	65	桃窓隨筆	十卷	○
24	室町通記	三卷	○	66	記事珠	十一卷	○
25	伊那志	一卷		67	為山餘簣	十三卷	○
26	伊那志略	十六卷	○●	68	学易說 (学易記か)	三卷	○
27	伊那古道記	一卷		69	月山記事	一卷	○
28	伊那地理說華圖	一卷		70	論孟考文續録	一卷	○
29	箕輪記	一卷		71	尚友篇	一卷	
30	箕輪記 附録	一卷		72	一話	二卷	
31	古碑考 (壺碑考か)	一卷	○	73	言之出次第 (言法出次第か)	一卷	○
32	青雲圖贊解	一卷		74	不用舎文稿	三卷	○
33	千字文譯注	一卷	○	75	希月舎文稿	四卷	○
34	源流生卒考	一卷		76	中侗詩集	五卷	○
35	國字說	一卷	○	77	中侗文集餘稿	一卷	○
36	佐渡志	一卷	○	78	寓意草	一卷	○
37	山家温泉記行	一卷		79	中叟雜體百首	一卷	○
38	北信記行	一卷		80	乙未留	一卷	
39	遊駿志	一卷		81	戊戌留	一卷	○
40	日本歷世帝王歌 (歷代國號歌か)	一卷	○●	82	庚子留	一卷	○
41	文園得意	五卷	○	83	辛丑留	一卷	○
42	鉾持事略	一卷		84	丙子留	一卷	

通番	書名	卷数	所蔵
85	己酉留	一卷	○
86	壬寅留	一卷	○
87	蝦蟇考	一卷	
88	請事斯語 (諸事斯語か)	一卷	○
89	國之光	一卷	
90	傷寒論句解	八卷	
91	傷寒論句解 後辨正	六卷	
92	傷寒作者考	一卷	○
93	傷寒名數解通義	一卷	○
94	傷寒名數解續編	三卷	○
95	傷寒用字例	一卷	○
96	後醫談	一卷	○
97	藥説	一卷	○
98	續本草和名	一卷	
99	柏譜	一卷	
100	古方標的	一卷	
101	古方標的 續	一卷	
102	方穀	一卷	○
103	方穀 續	一卷	○
104	醫喩	十卷	○
105	病候式	一卷	○
106	醫事問答	一卷	
107	求我篇	一卷	○
108	醫學源流論	一卷	
109	慎行餘言	一卷	○
110	折肱餘録	一卷	○
111	痘瘡撮要	一卷	○
112	外治小言	一卷	○
113	傷寒論直圖	一枚	
114	傷寒論横圖	一枚	
115	中邨家乗	一卷	
116	中邨家乗 裏書	一卷	
117	越之水	一卷	
118	越之水 續	一卷	
119	淡齋先生行状	一卷	
120	鸞岡先生行状	一卷	
121	藤衣新製	一卷	
122	黒水餘滴	一卷	
123	祭冊	一卷	
124	希月舎課業録	一卷	
125	蒨原拾葉	百二十卷	

三、 徂徠学関係著述について

三・一、『尚友録』

中村元恒の『尚友録』は賢哲百三十五名の伝歴を述べる伝記集である。次節で述べるが、元恒による徂徠学関係著述として『尚友録』「卷之二」「卷之三」に徂徠および徂徠門下七十五名の伝記が記述されており、徂徠門人録の性質を有していることから、徂徠の古文辞学および徂徠門下を含む徂徠学派の動向を知る一助となろう。元恒の幅広い関心は儒者に限らず、医者や諸藩士についても詳述しており、その強さが窺える。

本稿で用いる『尚友録』は長野県伊那市立高遠町図書館の希月舎文庫（以下、希月舎本）^(十三) および馬嶋家文庫（以下、馬嶋家本）^(十四) 所蔵のものである。希月舎文庫には元恒の父元茂、元恒、次子の元起の編著書のほか阪本天山の自筆本などを蔵している。馬嶋家本は高遠藩医であった馬嶋家五代柳一郎（号は楽斎）が明治十五（一八八二）年に書写したものである。

高遠町図書館「伊那市立高遠町図書館蔵和漢古書目録―希月舎文庫―」（以下、「和漢古書目録」）によれば希月舎本は「江戸末写本」で他書が元恒と明記されるのに対し、書写者は不明となっている。元恒の自伝年譜『蘧非』や高遠町図書館所蔵の元恒自筆資料^(十五)と希月舎本の筆跡を鑑みるに、運筆に類似性が見られ元恒の

原稿本でなくとも手写本である可能性が高いと考えられる。次点の可能性として次子の元起も一部の運筆が似ているものの、元恒の自筆は墨の濃淡や字形が一定であるのに対して、元起は墨の濃淡が激しく書き始めと書き終わりで字形が乱れがちである。このことから少なくとも希月舎本は元恒自筆のものと推定できよう。

以下に（A）から（F）まで筆跡の検討に用いた資料を示す。（A）は希月舎本であり、（B）から（E）は既に元恒自筆と判明している資料である。（F）は元恒の次子元起の自筆資料である。

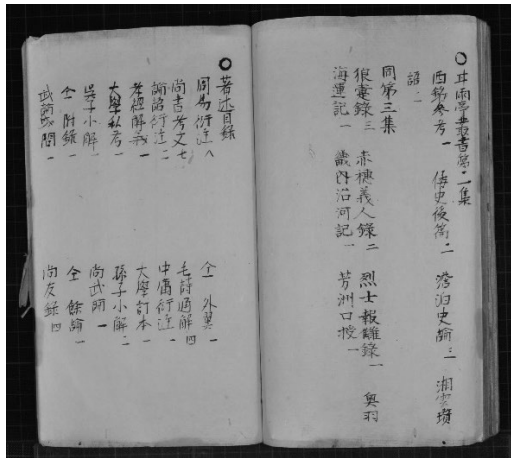
書誌タイトルは希月舎本と馬嶋家本とで合冊の組み合わせが異なるため、題簽から取り、備考に内題を載せた【表5】【表6】。また『尚友録』が取り上げる人物を表にまとめた【表7】。

【表5】希月舎本

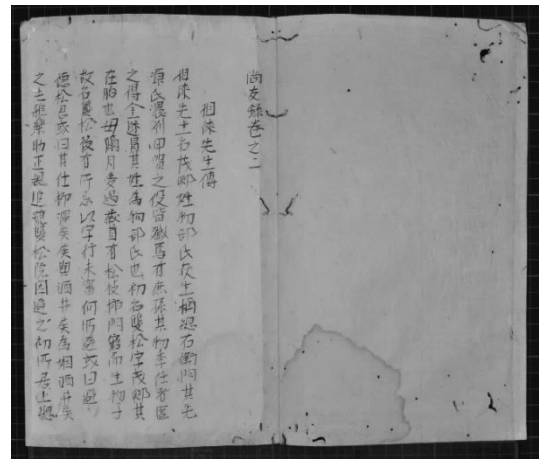
尚友録	タイトル	丁数	一丁行数	執筆者	書写者	形態	数量	法量（縦×横 cm）	備考
一	尚友録 一	27丁	10行	中村元恒	中村元恒	冊子	1	25・9 ×16・8	内題「尚友録卷之一」
二	尚友録 二	55丁	11行	中村元恒	中村元恒	冊子	1	25・9 ×16・8	内題「尚友録卷之二」
三	尚友録 三	55丁	11行	中村元恒	中村元恒	冊子	1	25・9 ×16・8	内題「尚友録卷之三」
四	尚友録 四	23丁	11行	中村元恒	中村元恒	冊子	1	25・9 ×16・8	内題「尚友録卷之四」

【表6】馬嶋家本

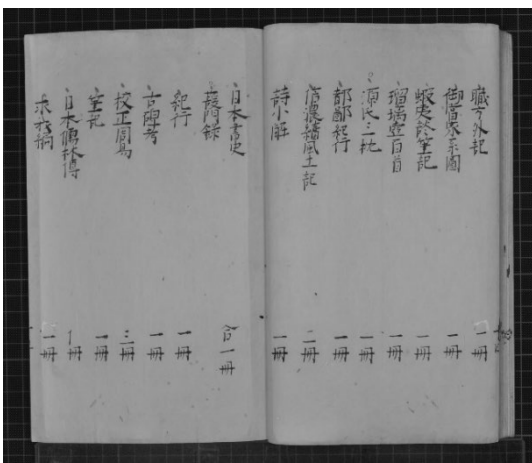
尚友録	タイトル	丁数	一丁行数	執筆者	書写者	形態	数量	法量（縦×横 cm）	備考
一	尚友録 日	45丁	11行	中村元恒	馬嶋樂斎	冊子	1	25・7 ×16・6	内題「尚友録卷之壹」
二	尚友録 月	48丁	11行	中村元恒	馬嶋樂斎	冊子	1	25・7 ×16・6	内題「尚友録卷之三」
三	尚友録 星	24丁	11行	中村元恒	馬嶋樂斎	冊子	1	25・7 ×16・6	内題「尚友録卷之四」



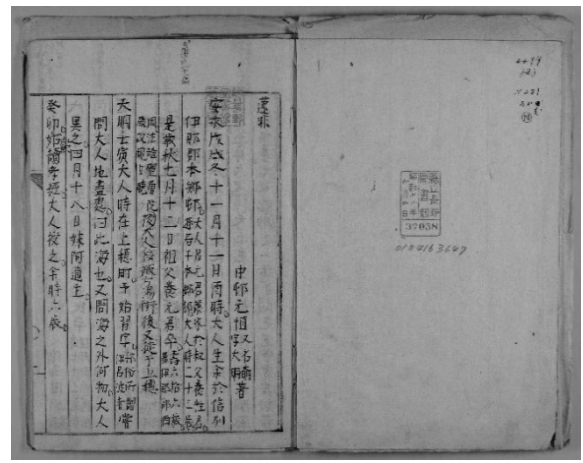
(D) 『希月舎蔵書目録 上』
(所蔵 伊那市立高遠町図書館)



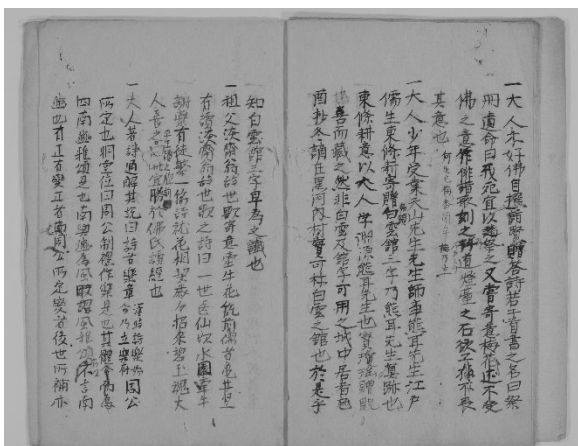
(A) 『尚友録』 (所蔵 伊那市立高遠町図書館)



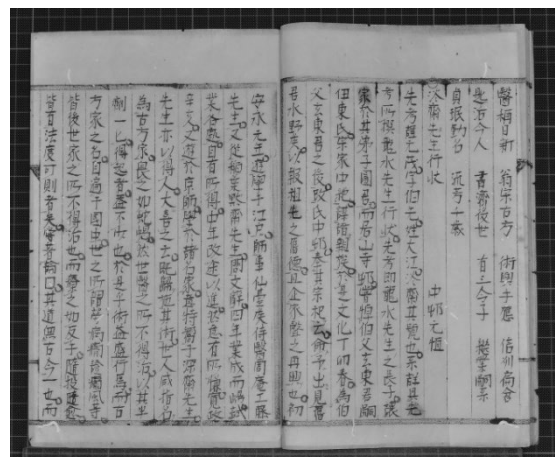
(E) 『不用舎写本目録』
(所蔵 伊那市立高遠町図書館)



(B) 『蘧非』 (所蔵 県立長野図書館)



(F) 『先考中府府君行實』手稿
(所蔵 県立長野図書館)



(C) 『碑銘集』 (所蔵 伊那市立高遠町図書館)

【表7】『尚友録』人名一覽表

通番	尚友録	人名	生没年	通番	尚友録	人名	生没年
1	惺窩先生	藤原惺窩	永祿四年－元和五年 (1561－1619)	31	伊藤東里	伊藤東里	宝曆七年－文化十四年 (1757－1817)
2	羅山先生	林羅山	天正十一年－明曆三年 (1583－1657)	32	三宅緝明	三宅觀瀾	延宝二年－享保三年 (1674－1718)
3	石川凹	石川丈山	天正十一年－寛文十二年 (1583－1672)	33	雨森東	雨森芳洲	寛文八年－宝曆五年 (1668－1755)
4	堀正意	堀杏庵	天正十三年－寛永十九年 (1585－1643)	34	中邨蘭林	中村蘭林	元禄十年－宝曆十一年 (1697－1761)
5	松永遐年	松永尺五	文禄元年－明曆三年 (1592－1657)	35	野中良繼	野中兼山	元和元年－寛文三年 (1615－1664)
6	那波觚	那波活所	文禄四年－正保五年 (1595－1648)	36	佐藤直方	佐藤直方	慶安三年－享保四年 (1650－1719)
7	小瀬道喜	小瀬甫庵	永祿七年－寛永十七年 (1564－1640)	37	浅見安正	浅見綱斎	慶安五年－正徳元年 (1652－1712)
8	中江藤樹	中江藤樹	慶長十三年－慶安元年 (1608－1648)	38	岡白駒	岡白駒	元禄五年－明和四年 (1692－1767)
9	熊沢伯繼	熊沢蕃山	元和五年－元禄四年 (1619－1691)	39	巖垣龍溪	岩垣竜溪	寛保元年－文化五年 (1741－1808)
10	貝原篤信	貝原益軒	寛永七年－正徳四年 (1630－1714)	40	徂徠先生	荻生徂徠	寛文六年－享保十三年 (1666－1728)
11	宇都宮三近	宇都宮遯庵	寛永十年－宝永四年 (1633－1707)	41	天山先生	阪本天山	延享二年－享和三年 (1745－1803)
12	中邨之欽	中村暢斎	寛永六年－元禄十五年 (1629－1702)	42	三宅島	三宅寄斎	天正八年－慶安二年 (1580－1649)
13	山崎嘉	山崎闇斎	元和四年－天和二年 (1619－1682)	43	江邨宗貞	江村専斎	永祿八年－寛文四年 (1565－1664)
14	木下貞幹	木下順庵	元和七年－元禄十一年 (1621－1699)	44	陳元賛	陳元賛	万曆十五年－寛文十一年 (1587－1671)
15	朱舜水	朱舜水	万曆二十八年－天和二年 (1600－1682)	45	二山義長	二山時習堂	元和九年－宝永六年 (1623－1709)
16	米川一貞	米川操軒	寛永三年－延宝六年 (1626－1678)	46	祇園瑜	祇園南海	延宝四年－寛延四年 (1676－1751)
17	深見玄岱	深見玄岱	慶安元/二年－享保七年 (1648/49－1722)	47	井上通熙	井上蘭台	宝永二年－宝曆十一年 (1705－1761)
18	源白石	新井白石	明曆三年－享保十年 (1657－1725)	48	南部景衡	南部南山	万治元年－正徳二年 (1658－1712)
19	室直清	室鳩巢	明曆四年－享保十九年 (1658－1734)	49	西川忠英	西川如見	慶安元年－享保九年 (1648－1724)
20	藤井季廉	藤井懶斎	寛永五年－宝永六年 (1628－1709)	50	向井元升	向井元升	慶長十四年－延宝五年 (1609－1677)
21	五井純貞	五井蘭洲	元禄十年－宝曆十二年 (1697－1762)	51	名古屋玄醫	名古屋玄医	寛永五年－元禄九年 (1628－1696)
22	伊藤維楨	伊藤仁斎	寛永四年－宝永二年 (1627－1705)	52	北山友松子	北山寿庵	寛永十七年－元禄十四年 (1640－1701)
23	伊藤長胤	伊藤東涯	寛文十年－元文元年 (1670－1736)	53	吉益為則	吉益東洞	元禄十五年－安永二年 (1702－1773)
24	並河簡亮	並河天民	延宝七年－享保三年 (1679－1718)	54	賀川玄悦	賀川玄悦	元禄十三年－安永六年 (1700－1777)
25	奥田士享	奥田三角	元禄十六年－天明三年 (1703－1783)	55	加藤謙齋	加藤謙斎	寛文九年－享保九年 (1670－1724)
26	青木敦書	青木昆陽	元禄十一年－明和六年 (1698－1769)	56	香月則真	香月牛山	明曆二年－元文五年 (1656－1740)
27	小川成章	小河立所	慶安二年－元禄九年 (1649－1696)	57	中西惟忠	中西深斎	享保九年－享和三年 (1725－1803)
28	中嶋正佐	中島浮山	万治元年－享保十二年 (1658－1727)	58	原雙桂	原双桂	享保三年－明和四年 (1718－1767)
29	武欽繇	武田梅庵	享保元年－明和三年 (1716－1766)	59	間大業	間重富	宝曆六年－文化十三年 (1756－1816)
30	伊藤東所	伊藤東所	享保十五年－文化元年 (1730－1804)	60	細井平洲	細井平洲	享保十三年－享和元年 (1728－1801)

三二一 『夔門録』

現在『尚友録』の内容と重複しているものは高遠町図書館所蔵の『夔門録』（以下、高遠町本）^(十六)と東京大学総合図書館所蔵の『護門録』（以下、東大本）^(十七)二点である。本稿で用いた希月舎本・馬嶋家本『尚友録』「卷之二」「卷之三」すべてが『夔門録』の内容となっている。興味深い点は自筆と目される希月舎本にはないが、馬嶋家本「卷之四」巻頭に附載されていた清水長孺^(十九)「夔門録叙」と元恒自序が『夔門録』では『尚友録』「卷之二」の内容の前に書かれており、体裁が整えられていることである。またこの元恒自序により『夔門録』が文政四（一八二二）年に成稿したことが確認できる。しかしながら、既に挙げた先行研究ではいずれも『夔門録』の名は見えず、『尚友録』となっており、『尚友録』と『夔門録』の成立時期の前後については分析が必要となっている。

現在の徂徠学派を研究対象とする際、著者不明のままである『護園雑話』を用いている。本稿が扱う『尚友録』「卷之二」「卷之三」およびそれを抜粋した『夔門録』は『護園雑話』が四十余名を取り上げるのに対して七十五名を取り上げており、今後の徂徠学派の研究に寄与できるものと考ええる。

以下は希月舎本『尚友録』「卷之三」に記載されている徂徠門下七十五名を示した表である【表8】。『夔門録』の記述順に通番を付し、人名表記と現在の人名表記を示し、人名辞典等を用いて生没年を併記した^(十八)。しかしながら、七十五名のうち後半は人名が

記されるのみで、詳細が不明な人物もいる。これら詳細不明の人物を特定することが今後の課題の一つである。

【表8】『殘門録』人名一覽表

通番	殘門録	人名	生没年	通番	殘門録	人名	生没年
1	物觀	荻生北溪	延宝元年－宝曆四年 (1673－1754)	26	朝比奈泰亮	晁南山	元禄十一年－明和九年 (1698－1772)
2	物道濟	荻生金谷	元禄十六年－安永五年 (1703－1776)	27	菅谷晨耀	菅甘谷	元禄四年－宝曆十四年 (1691－1764)
3	太宰純	太宰春臺	延宝八年－延享四年 (1680－1747)	28	大野通明	大野北海	？－？
4	安藤煥圖	安藤東野	天和三年－享保四年 (1683－1719)	29	朝比奈文淵	朝比奈文淵	？－享保十九年 (？－1734)
5	服元喬	服部南郭	天和三年－宝曆九年 (1683－1759)	30	本多侯忠統	本多猗蘭	元禄四年－宝曆七年 (1691－1757)
6	平玄中	平野金華	元禄元年－享保十七年 (1688－1732)	31	田中良暢	田中蘭陵	元禄十二年－享保十九年 (1699－1734)
7	山縣孝孺	山県周南	貞享四年－宝曆二年 (1687－1752)	32	水野元朗	水野元朗	元禄五年－延享五年 (1692－1748)
8	鷹見正長	鷹見爽鳩	元禄三年－享保二十年 (1690－1735)	33	岡田宜汎	岡田兼山	元禄元年－寛延三年 (1688－1750)
9	守屋煥明	守屋峨眉	元禄六年－宝曆四年 (1693－1754)	34	板倉九	板倉復軒	寛文五年－享保十三年 (1665－1728)
10	高野世馨	高野蘭亭	宝永元年－宝曆七年 (1704－1757)	35	板倉安世	板倉璜溪	宝永六年－延享四年 (1709－1747)
11	三浦義質	三浦竹溪	元禄二年－宝曆六年 (1689－1756)	36	板倉經世	板倉竜洲	？－？
12	宇佐美惠	宇佐美瀧水	宝永七年－安永五年 (1710－1776)	37	松崎堯臣	松崎白圭	天和二年－宝曆三年 (1682－1753)
13	山田正朝	山田麟嶼	正徳二年－享保二十年 (1712－1735)	38	鳴嶋鳳卿	成島錦江	元禄二年－宝曆十年 (1689－1760)
14	水足業元	水足博泉	宝永四年－享保十年 (1707－1732)	39	大内承裕	大内熊耳	元禄十年－安永五年 (1697－1776)
15	田中省	田中桐江	寛文八年－寛保二年 (1668－1742)	40	宇鑑	宇野士朗	元禄十四年－享保十六年 (1701－1732)
16	久津見義治	久津見華岳	？－？	41	伊東元啓	伊藤元啓	？－？
17	土屋昌英	土屋藍洲	貞享三年－宝曆十一年 (1686－1761)	42	東條洵亨	東条伯通	？－寛延元年 (？－1748)
18	入江忠圀	入江南溟	天和二年－明和六年 (1682－1769)	43	匹田進修	匹田九臯	元禄十三年－元文二年 (1700－1737)
19	秋元以正	秋元澹園	元禄元年－宝曆元年 (1688－1752)	44	雨森顕允	雨森鵬海	元禄十一年－？ (1698－？)
20	吉田有鄰	吉田孤山	？－？	45	守山世子	松平頼寛	元禄十六年－宝曆十三年 (1703－1763)
21	石川之清	石川大凡	？－寛保元年 (？－1741)	46	莊田允益	莊田子謙	？－宝曆四年 (1697－1754)
22	木下實聞	木下蘭臯	天和元年－宝曆二年 (1681－1752)	47	石嶋正猗	石嶋筑波	宝永五年－宝曆八年 (1708－1758)
23	曲直瀬正珪	越智雲夢	貞享三年－延享三年 (1686－1746)	48	岡井孝仙	岡井巖州	元禄十五年－明和二年 (1702－1765)
24	山井鼎	山井崑崙	元禄三年－享保十三年 (1690－1728)	49	膝様卿	和智東郊	元禄十六年－明和二年 (1703－1765)
25	根本遜志	根本武夷	元禄十二年－明和元年 (1699－1764)	50	原蘭之	？	？－？

通番	獲門録	人名	生没年
51	邨守望	?	? - ?
52	松尚綱	松本尚綱	? - 延享二年 (? - 1745)
53	藤煥貞	安藤奎州	? - ?
54	木晟	木村梅軒	元禄十五年 - 宝暦三年 (1702 - 1753)
55	墨昭猷	住江滄浪	元禄四年 - 享保十三年 (1691 - 1728)
56	佐能孝	?	? - ?
57	武敬	?	? - ?
58	晁興	?	? - ?
59	源敏樹	辻湖南	? - ?
60	芳恂益	芳村天仙	? - ?
61	望月三英	望月三英	元禄十年 - 明和六年 (1697 - 1769)
62	貫隆夫	?	? - ?
63	祕子潤	?	? - ?
64	中根若思	中根東里	元禄七年 - 明和二年 (1694 - 1765)
65	木貞貫	木村蓬萊	享保元年 - 明和三年 (1716 - 1766)
66	釋原資	万庵原資	寛文六年 - 元文四年 (1666 - 1739)
67	釋元皓	大潮元皓	延宝四年 - 明和五年 (1676 - 1768)
68	釋玄海	万庵原資	寛文六年 - 元文四年 (1666 - 1739)
69	釋了玄	耆山	正徳二年 - 寛政六年 (1712 - 1794)
70	釋天教	聖黙	? - ?
71	釋義全	義全	? - ?
72	釋大黙	慧寂	元禄八年 - 宝暦十二年 (1695 - 1762)
73	釋慧巖	慧巖	? - 万延元年頃 (? - 1861頃)
74	釋慧通	慧通	? - 天保五年 (? - 1834)
75	釋覺玄	覺玄	? - ?

四、 おわりに

本稿では、中村元恒『尚友録』の解説を行ない、その成果を活字化して公表する前段階として、中村元恒と『尚友録』について概要をまとめた。

元恒については、元恒研究に寄与することを企図して『先考中僚府君行實』をもとに家系や学統図を、『蘧非』をもとに年表を作成した。また元恒の著述については全容が把握しにくいため、一覧表を作成し、高遠町図書館「和漢古書目録」および「馬嶋家文庫目録」を参照して所蔵状況を示した。『尚友録』については、中村元恒自筆の可能性が高いことを指摘し、書誌事項をまとめた上で、人物項目を順次並べた。以上より『尚友録』の内容を概観するという目的は達成できたと思われる。また『尚友録』と『濩門録』『護門録』の関係を明らかにすることで、今後より中村元恒を取り巻く学問状況が見えてくるのではないだろうか。

今後の展望として所蔵を明らかにした元恒の自筆資料や書簡類等を扱うことで、より元恒の人物像や思想が明瞭になろう。とりわけ元恒の儒学資料が多く残されているため、荻生徂徠にはじまる古文辞学思想をどのように受容し、他学派の思想を取り入れていったのか、今後の研究を進めていきたい。

注

- (一) 大内熊耳(元禄十(一六九七)年—安永五(一七七六)年)。江戸中期の儒者。名は承裕、字は子綽、通称は忠太夫、号は熊耳。はじめ秋元澹園に学び、のち荻生徂徠に学んだ。ついで京に至って伊藤東涯に見え、ついに長崎に赴き、留まって講説した。この時はじめて『李滄溟集』を見て大いに喜び、江戸に帰り服部南郭の指導を受けて文名が大いに高まった。のち唐津侯の儒員となった。安永五年(一七七六)四月二十八日、江戸で八十歳で没した。
- (二) 『上伊那誌 第四卷 人物篇』(上伊那誌刊行会、一九七〇年)二〇四—二〇五頁
- (三) 『高遠町誌 上巻 歴史二』(ぎょうせい、一九八三年)六一—六六頁
- (四) 『高遠町誌 人物篇』(ぎょうせい、一九八六年)二一九—二二〇頁
- (五) 中村元起(文政三(一八二〇)年—明治十七(一八八四)年)。名は元起、字は喜卿、通称は忠蔵。中村中僚の次子で中村弥六の父。弘化二(一八四五)年父の跡を継ぎ信濃高遠藩に仕える。昌平黌で林復斎に学び塾頭となった。万延元(一八六〇)年、創設された藩校進徳館の教授。明治維新後、松本に開智学校を開く。著作に『経書考』などがある。
- (六) 県立長野図書館所蔵。信州デジタルコモンズで閲覧可能。手写： <https://www.ro-da.jp/shinshu-decommons/ibrary/02BK0104163639> (二〇一三年五月十八日閲覧)
- (七) 手稿： <https://www.ro-da.jp/shinshu-decommons/ibrary/02BK0104163688> (二〇一三年五月十八日閲覧)
- (八) 県立長野図書館所蔵。
- (九) <https://www.ro-da.jp/shinshu-decommons/ibrary/02BK0104163647> (二〇一三年五月十八日閲覧)
- (一〇) 二巻から成り、第一巻は元恒の自筆で、文政四(一八二二)年までである。第二巻は元恒を「大人」と称し、文中に「余」云々と始まる記述者の回顧が述べられている。墨の濃淡が一定でなく、墨が薄くなると墨を継ぎ足すという

次子元起の特徴に合致している。記述者の回顧と次子元起の行程と時期が共通している（『高遠城と藩学』略年表を参照）ことから、第二巻の記述者は元起と考えられよう。

- (六) 高津才次郎「郷土文献の集大成」（『信濃』第一次第一号—第二次第二号、第二次第五号、其一—其十二、一九三二年）
- (七) 北村勝夫『高遠城と藩学』（名著出版、一九七八年）一九四—一九八頁
- (八) 前掲『高遠城と藩学』一五四—一八二頁
北村氏による中村元恒の略年表が付されており、簡便である。
- (九) 阪本天山「延享二（一七四五）年—享和三（一八〇三）年」。近世中期の砲術家。荻野流増補新術（天山流）の創始者。通称孫八、名は俊豈、天山と号した。信州高遠藩士の家に生まれ、幼少より父運四郎英臣について荻野流砲術を学ぶ。安永七（一七七八）年旋回俯仰が自在にできる大砲の砲架を發明し、「周発台」と名づけた。天明七（一七八七）年一時閉門を命ぜられたが、以後著作と門弟の教授に専念した。享和元（一八〇一）年三男鉉之助を伴って長崎に遊学し、大村、平戸の諸藩に招かれ砲術を指導したが、享和三（一八〇三）年二月、病を得て平戸藩屋敷に没した。
- (十) 猪飼敬所「宝曆十一（一七六一）年—弘化二（一八四五）年」。江戸中後期の儒者。手島堵庵に心学をまなび、儒学に転じて古注学の岩垣竜溪の門にはいる。京都、淡路洲本、但馬豊岡など各地で講説。天保二（一八三一）年藤堂高猷にまねかれて伊勢津藩儒となる。名は彦博、字は文卿・希文。著作に『論孟考文』『管子補正』などがある。
- (十一) 岩垣竜溪「寛保九（一七四一）年—文化五（一八〇八）年」。宮崎筠圃に古義学を学び、伏原宣条、皆川淇園に師事し、古注学を考究し、私塾遵古堂を開く。大舍人權助。名は彦明、字は亮卿、姓は巖垣とも。著作に『論語集解標記』『松蘿館詩鈔』などがある。
- (十二) 木沢天童「明和二（一七六五）年—文政二（一八一九）年」。江戸時代中後期の儒者。名は大淵。字は澹兮。通称は源一郎。別号に樟山。信濃松本藩士。藩校崇教館の助教となった。著作に『琵琶緒三百余篇』『君箴』などがある。
- (十三) 前掲「郷土文献の集大成」（『信濃』第一次第十集、其九、一九三二年）
- (十三) 『尚友録 一』〔希月舎 266〕
『尚友録 一・二』〔希月舎 267〕
『尚友録 四』〔希月舎 268〕

- (十四) 『尚友録』「馬嶋家文庫 2-553」—「馬嶋家文庫 2-555」
- (十五) 『碑銘集（祖先碑銘録）』〔希月舎 077〕
『希月舎蔵書目録 上』〔希月舎 263〕
『希月舎蔵書目録 下』〔希月舎 264〕
『不用舎蔵書写本目録 一巻』〔希月舎 265〕
- (十六) 『濩門録 上』〔希月舎 459〕
『濩門録 下』〔希月舎 460〕
- (十七) 『護門録 二巻』（東京大学総合図書館所蔵、南葵文庫）登録番号「0008566986」
- (十八) 一覧表を作成するにあたり、生没年は以下の書籍を参照した。
『諸家人物志』（五極軒十意語述、一七六九年）
国立国会図書館 デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2557772> (二〇一三年七月十三日閲覧)
『寛政重脩諸家譜』第一輯（國民圖書、一九二二年）
国立国会図書館 デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1082717> (参照 2023-06-06)
龜山三編『近代先哲碑文集』（第九、徂徠物先生碑文集、夢硯堂、一九六七年）
国立国会図書館 デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/3009900> (二〇一三年六月五日閲覧)
『真宗僧名辞典』（百華苑、一九七七年）
『萩市史』（第二巻、萩市史編纂委員会、一九八七年）p.542
『黄檗文化人名辞典』（思文閣出版、一九八八年）
『新編岡崎市史』（第二十巻、新編岡崎市史編纂委員会、一九九三年）
『江戸文人辞典 国学者 漢学者 洋学者』（東京堂出版、一九九六年）『日本人名大辞典』（講談社、二〇〇一年）
『日本近世人名辞典』（吉川弘文館、二〇〇五年）
信原修『雨森芳洲と玄徳潤…朝鮮通信使に息づく「誠信の交わり」』（明石書店、二〇〇八年）
『新纂浄土宗大辞典』（浄土宗、二〇一六年）『新編岡崎市史』（第十三巻、新編岡崎市史編纂委員会、一九八四年）
清水長孺「宝曆五（一七五五）年—天保七（一八三六）年」。江戸時代中後期の儒者。叔父下郷学海、市川鶴鳴に学び、江戸で細井平洲、柴野栗山に師事する。伊勢神戸藩に藩儒として仕え、のち京都で塾を開く。名は長孺、字は仲（中）和、通称平八。著作に『蜚煙焦余集』がある。

〔附記〕

資料を提供してくださった長野県伊那市立高遠町図書館、
県立長野図書館に厚く御礼申し上げます。

Abstract

Basic Study on Nakamura Mototsune and Soraigaku related Writings

HORIO, Yuma

Keywords: Nakamura Mototsune, Shōyūroku, Ogyū Sorai, Sorai school, Record of the Students

The research objective of this paper is to clarify the scholarly relationship between Ogyū Sorai, a Confucian scholar in the mid-Edo period, and Nakamura Mototsune, a Confucian scholar and physician in the late-Edo period of the Shinshu Takato domain. Nakamura Mototsune's mentor in his studies was Sakamoto Tenzan, who followed the teachings of Ogyū Sorai, hence Mototsune's scholarship was also based on the teachings of Sorai. One of Nakamura Mototsune's writings is the "Shōyūroku" ("尚友録"). This book is a biographical collection that describes the lives of 135 wise and virtuous individuals. Mototsune's "Shōyūroku"("尚友録") is exclusively held at the Takatomachi Library in Ina City, Nagano Prefecture, and is a valuable text not only for local studies but also for research on Ogyū Sorai. Out of the 135 individuals, 75 are also known as "Kenmonroku,"("殘門録") which lists the names of disciples of the Sorai school. When studying figures from the Sorai school, the unidentified author's "Kenen Zatswa"("護園雜話") lists around 40 individuals and is frequently referenced due to its convenience. The "Shōyūroku"("尚友録") discussed in this paper lists approximately twice as many disciples of the Sorai school, making it a more convenient reference for future research on the Sorai school. This study provides an overview of Nakamura Mototsune, utilizing his handwritten and copied materials held at the Takatomachi Library, as well as the Nakamura family materials held at the Nagano Prefectural Library. After the general overview of Mototsune, his writings, particularly the "Shōyūroku,"("尚友録") are analyzed. As a result, it is indicated that the "Shōyūroku"("尚友録") held at the Kigetsu-sha Bunko in the Takatomachi Library is likely a copied version by Nakamura Mototsune himself. This study only provides a general overview of Mototsune's writings, and it is necessary for future research to delve into the content of his writings to uncover not only his philosophical studies but also the connection to the background of Sorai's teachings.